

エッセイ

日文研の新しい伝統作り

林 志 宣

数日前、韓国人は秋夕（中秋会、日本のお盆に相当）を祝った。この国の祝日では家族が豊かな収穫の喜びを分かち合い、祖先の霊を祀るために集まる。私は一年間の日文研生活を終えて、今年はこの祝いに家族と集まる事が出来た。満月がかつてないほど金のように暖かく輝いていたのは、ちょうど佐野先生と鴨川べりの料亭で一ヶ月前に見たものと同じようだった。鴨川は韓国の有名な詩人、尹東柱（ユン・ドンジュ）が一九四〇年代、同志社大学在学中に詩想を練りながら散歩した場所として知られている。そのときには今よりもさらに強く輝いていたかもしれない月を見て、延世大学の秀才だった尹は祖国に思いを馳せた。七〇年後、同じ月がソウルの空高く輝き、私は日文研でやりおえた芸術的な仕事やそこで得たインスピレーションについて、思いをめぐらせていた。

初めて京都を知ったのは、伝統文化・芸術（その多くは世界遺産と認められている）を通してではなく、新たに生まれ発展しつつある芸術を通してだった。四年前、京都芸術センターで、日韓両国の若い芸術家の作品展の開幕式に出席した。その式の一つが現代音楽コンサートで、

コントラバス奏者にしてドイツの大学教授である文屋充徳が私の「Memory」を演奏した。演奏会后、日韓の若い芸術家・音楽家が意見やアイデアを交換する有意義な時間をすごした。栄えある京都賞授賞者にはジョン・ケージほか現代音楽作曲家、そして韓国の著名な芸術家、白南準（ナム・ジュン・パイク）も含まれる。千年の古都、京都は伝統と近代、西洋と東洋が共存する興味深い場所になった。

そのとき以来、京都にすっかり魅せられてしまった。時を超越しつつ伝統を守り、同時に新たな伝統を創造し続ける都市。近くて遠い国、日本を経験したいという欲求が高まるなかで、偶然日文研を知った。細川周平先生に突然連絡をし、不可能と思えるような可能性を訊ねた。世界的に知られた学者が集う研究所に現代音楽作曲家が現われることは、最初、ミスマッチと思えたが、音楽を含めて芸術はつねに歴史のなかで展開しており、音楽史は社会、政治、文化の、芸術の潮流の変化と並行して進んできた。こう考えると日文研は私にとって理想の場所となった。

細川先生は最良の相談相手だった。一緒に連れてもらったある大阪の演奏会では韓国の伝統楽器、伽羅琴（カヤグム）と日本の伝統楽器、箏の共演を聴き、両国の伝統音楽の類似と相違について理解することができた。文楽にも一緒に行き、人形劇で使われる日本の伝統楽器に近代的な響きを聴き取った。神戸大学の学生に自作についてレクチャーした時には、終了後、大田先生や他の先生方が加わり現代音楽の普遍性について議論することができた。稲賀先生に初めて能に招いてもらった時には、やはり近代的な響きを発見した。なぜ二〇世紀になってヨーロッパの現代作曲家がアジアに音楽の新たな発想源を見出したのか、その理由がわかった。稲賀先生の研究会で陶芸家近藤高弘と知り合うと、他の京都在住のアーティストを集めた

発表会に呼ばれ、小さい会ながら、強い印象を残した。日文研で書いたチェロ独奏のための「Chasmos」の初演はギャラリーに改良した町家の畳の上で行われた。その時には大西宏志（京都造形芸術大学）、大船真言の作品が展示され、外の祭りの浮き立つような音があたかも音楽の一部であるかのように混ざり合って流れた。私は長いこと、現代音楽が社会と相互反応することを夢見ていたので、聴衆が自然に外の雑音を今集中している音楽の一部として認めたのは、まさしく記念すべき瞬間だった。

京都市立芸術大学の中村典子先生が強力に推し進めた国際フェスティバル「アジアの管絃の現在」（二〇一三年五月二五日）では日韓の作曲家が集まり、西洋音楽の導入と未来への方向について、深く議論する機会を得た。中村先生はシンポジウムとリサイタルの副題を私がオーケストラのために書き、シンポジウムで改訂初演した作品名から「不可能の可能性を生きる」とした。

日文研で過ごした一年は私にはまさに「不可能の可能性」だった。世界中から集まる客員研究者とアイデアや知識を交換しながら、日文研のなかで世界を体験した。国籍、性別、年齢、専門は異なっても、普遍的な理解を分かち合えた。まさしくこれらの「違い」のために、私たちの会話はますます面白くなり、深まっていった。パトリシア・フィスター先生のイブニング・セミナーでは桜の花、祭り、武道について目を開かされた。こうした話題は私のなかに新たな芸術的な興味と着想を湧き立たせてくれた。私の音楽をオンラインのリサイタルや演奏を聴いた日文研滞在中の研究者が述べてくれた感想は、かけがえのないヒントだった。

来年の秋、日韓の音楽家と振付家が京都で共同参加するパフォーマンスが計画されている。日文研で得た貴重な経験をもとに両国の現代音楽シーンの交流がますます盛んになり、同じよ

うな共同プロジェクトがソウルで展開できればよいと期待している。日文研に初めに到着したときに鼻をくすぐった木の甘い香りや挨拶してきた猿と鹿の家族は、今でも記憶から消えない。来年の秋、京都を再訪した際には日文研にやってきて感謝の気持ちをささげ、人生の贈り物であった時間をもう一度生きたい。

(延世大学教授／元国際日本文化研究センター外国人研究員)

原文…英語

翻訳…細川周平 (国際日本文化研究センター教授)

小特集「世界各地の『研究所』——新たな日本研究へ」

研究所としての日文研

小松 和彦

日文研は、国が必要と認めたミッションを遂行するために設置された研究機関である。当初は文部科学省の直轄の研究機関だったが、大学共同利用機関法人・人間文化研究機構を構成す